

日本経済新聞

1998年7月28日(火) 日本経済新聞より

サンゴ礁守れ 世界の輪

研究者らスクラム、海中調査し10年

大森 信

沖縄本島の西、約40キロに浮かぶ慶良間(けらま)諸島の1つ阿嘉(あか)島。島の周りに発達するサンゴ礁は、オーストラリアの名高いサンゴ学者ベロン博士が「世界の宝」と驚嘆したほど、種類が豊かだ。

---

### 年間200回以上潜る

この阿嘉島臨海研究所で、私たちは時に毎晩でも海に潜って、サンゴをはじめ海洋生物の研究を続けている。日本ばかりか世界中の研究者や、海に興味をもつ人々が自由に参加できるユニークなシステムをもち、この夏でちょうど10周年を迎えた。いわば、海を愛する世界の人たちの「国際潜りあいの10年」。この間に世界で初めての成果がいくつも得られている。

多くの生命をはぐくむサンゴ礁が破壊され、年々少なくなりつつある。自国にサンゴ礁を持つ数少ない先進国として、日本がその保全のために果たすべき役割は大きいはずだ。「ここにサンゴ礁の研究所を作れないだろうか」。小さな研究所は阿嘉島が好きなダイバーたちの、そんな話から生まれた。運営母体として熱帯海洋生態研究振興財団(保坂三郎理事長)が国の許可を得て設立された。保坂氏が私財を提供したまったくの民間の財団で、私は氏の熱意にうたれ、活動を手伝っている。

研究棟、設備、調査船などを整えるに際して、常駐の若い研究者たちは、それぞれに年間200本以上、水に潜って観察を続けるようにしてもらった。彼らは皆、それを守って魚になって仕事をしている。実際、海の中の本当のことはこうでもしないとわからない。

開設後まもなく、研究所の中心的な研究テーマとなった、造礁サンゴの有性生殖についての研究が、オーストラリアの研究者2人を招へいして始まった。精力的に調査を行い、25種のみドリイシサンゴの産卵を確認した。

サンゴは初夏の夜に一斉産卵し、受精してプラヌラ幼生となり、スリックと呼ばれる集団として漂流した後、着生してサンゴ礁をつくっていく。この産卵の翌朝の海面には、おびただしい数のサンゴの卵で赤潮のような帯ができる。

---

### 世界初ハイビジョン撮影

海中で、ピンクの卵が次々に舞い上がる光景は、何度見ても、恍惚(こうこつ)とさせられる美しさだ。その実際をハイビジョンでとらえられないかと、ソニーなどと取り組んだのは1989年のこと。当時の撮影装置は重さが全部で100キログラムもあって、ダイバーたちが移動撮影に大変苦労したし、夜中は強い照明にオヨギゴカイが集まって大群を作り、撮影の邪魔になって困ったが、苦労のかいあって、ハイビジョンの鮮明な産卵映像を初めて世界に見せることができた。

ではサンゴの卵や幼生はどこに行くのか。この動きを推定するのはこれまた難しい。そこで産卵にあわせ、千枚のはがきを海に流し、マスコミにも呼びかけて、漂着したところを知らせてもらった。なんと、速い場合は十日ほどで、遠く離れた沖縄本島ではがきがみつかった。慶良間の海から漂着した幼生が、沖縄本島の荒廃したサンゴ礁の回復に役立っているらしい。健康なサンゴ群集を近くの海域に保存することの大切さが示された。

また、カリフォルニア大学との共同研究では、ある種の藻類がサンゴ幼生の変態や着生を促進する化学物質を持っていることがわかり、今、その解明に努力している。順調に研究が進めば、やがて、幼生をひきつけるような着生基盤ができるかもしれない。そうすれば、世界のサンゴ礁の修復に、私たちの研究が役に立つだろう。こうした研究に打ち込む若い人たちの中から二人の博士が誕生したのも、研究所の誇りである。

成果はサンゴばかりではなく、ヤコウガイやアサヒガニなどの種苗生産、サンゴの天敵オニヒトデの分布、島の天然記念物ケラマジカの生態調査など多岐にわたるようになった。ただしいいことばかりではない。観測史上最大の台風にも直撃され、研究所の風速計は風速52.8メートルを記録してあ

えなく故障。ほかにも、大雨や不意の停電や湧水対策など、離島ゆえの苦労も多い。

---

### 機関誌で成果を説明

私たちはまた、サンゴ礁の保全や地球環境問題を広く理解してもらうために、成果をわかりやすく説明した機関誌「みどりいし」を刊行し、隣の島を含めた小中学校では、アカウミガメの子ガメを育てて海に放すなどの特別授業を行っている。好奇心いっぱいの子供たちを通じて、研究所の活動が地元の人々に理解され、役立てばうれしい。

こうしてこの十年間に国内の大学や研究機関から185、一般から120のグループがここを利用した。外国からも百人以上の研究者が訪れ、国際的にも知られるようになった。多様な活動を支えるための懐は正直言って豊かではない。建物もいたむ。今後も多くの人々の理解と支援が必要になるが、南の島の小さな研究所は広い熱帯の海に暮らす人々と手をつなぐ基地でもある。コバルトブルーのサンゴ礁を眺めながら、私たちの夢は広がる。

(おおもり・まこと = 東京水産大学教授)